

クリーニングクロス
Toraysee® for CE
USER'S REPORT 4

life
innovation

医療法人菊郷会
富丘腎クリニック

透析施設における Toraysee® for CE の活用について

TORAY
Innovation by Chemistry



01

当院で、Toraysee® for CE に関心を持ったきっかけ

当院は、北海道札幌市に本拠を持ち透析医療を柱にする医療法人菊郷会が運営する透析専門施設です。当院のほか、札幌センチュリー病院、石橋胃腸病院、愛育病院などのグループ病院があります。私は、当院の医療機器管理を統括する立場から医療安全を大前提に考慮しながら、大切な機器をどのように管理すべきかが課題であると考えていました。そのような中、Toraysee® が発売され、次亜塩素酸ナトリウム等の薬液による透析機器の外装等の劣化が問題と思われる点についての1つの解決策であると思いました。

02

最終的には施設ごとに管理方法の策定が必要

学会等の透析装置の管理指針*には、「透析ベッドの柵やオーバーテーブル、椅子などの環境表面、および透析装置外装は、透析終了ごとに洗浄(清拭)し、適切な消毒薬を用いて消毒する。」と記載され、解説では、「透析終了後、ベッド周辺の環境表面に付着した有機物や汚れを除去し次亜塩素酸ナトリウムで清拭消毒し、消毒後は水拭きする。目に見える血液の付着時は、ペーパータオルやティッシュクロス等で物理的除去を行った後、同濃度の次亜塩素酸ナトリウムで清拭消毒する。透析装置外装に対しても環境表面と同様に、500～1,000ppm(0.05～0.1%)次亜塩素酸ナトリウムで清拭消毒する。金属部分に関しては、同薬剤を使用したのち速やかに拭き取る。」と、記述には、薬液に対する懸念点が示唆されています。

現在、多種多様な環境クロスが発売されていますが、全ての病原性微生物に対して効果があるわけではありません。また、主要成分以外の成分が何なのかが明示されていないものも少なくなく、最終的には各施設ごと施設環境や業務状況に応じて、管理指針に基づきながら、資材を評価して管理方法を策定する必要があります。



写真提供：富丘腎クリニック

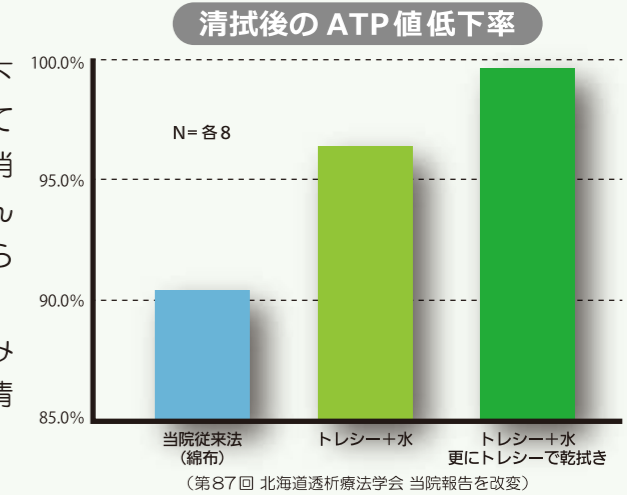
*平成27年3月31日 発行公益社団法人 日本透析医学会透析施設における標準的な透析操作と感染予防に関するガイドライン(四訂版)

03

当院における、Toraysee® for CE 導入への検討結果

当院では Toraysee® の導入に向けて検討を行いましたので以下に結果を紹介します。左ページのとおり、消毒の前提条件として「環境表面に付着した有機物や汚れを除去し(清拭)し、適切な消毒薬を用いて消毒する。」と記載されているとおり洗浄をきちんと行わないと、消毒薬の効果が十分発揮できないことはよく知られています。

Toraysee® は、洗浄に特化したクロスで、それ自体に薬液を含みませんが、水道水を含ませるだけで乾拭き時の約10倍程度清拭性能が高まることが知られています。



04

Toraysee® for CE の清拭能力の検討結果

Toraysee® の清拭能力の継続性を検討する研究目的で以下の方法によって、清拭後の ATP 値で評価を行いました。

I 清拭方法

終業時に透析機器タッチパネルを清拭。

■ 水道水含浸ガーゼ…1台を1枚で清拭

■ 水道水含浸トレシー…1台清拭(これを1回とカウント)

■ 第四級アンモニウム塩含有環境クロス…1台を1枚で清拭

I トレシーの洗浄消毒

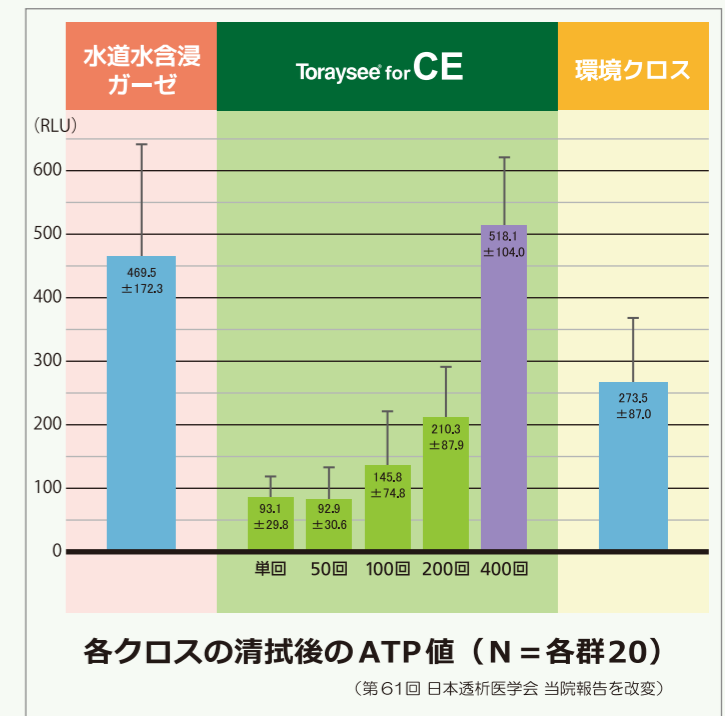
7回清拭後、当院器具消毒の規定である200ppm次亜塩素酸ナトリウムに3分浸漬し、水道水にて洗浄後、乾燥させて継続使用。

I トレシーの継続使用の回数

50回、100回、200回、400回の4パターンに設定。

I 結果

継続使用が50回程度であれば、Toraysee® は新品使用時と同等の性能があると示唆された。継続使用が50回以上であっても、200回までは、当院従来の清拭方法や環境クロスよりも高い清拭性能を示した。



まとめ

Toraysee® は、他の清拭材料に比べ高い清拭性能を有することが知られています。今回、性能評価目的で清拭能力の継続性の評価を行いました。結果から考察すると、1台あたりの清拭単価は環境クロスを下回りました。現状、環境クロスにかかる費用も少額とは言いがたく、資材の使用法についての見直しは必要です。トレシーは消毒液も含浸させることも可能であり、透析施設においても様々な活用法があります。少なくとも綿布、布巾を使用している箇所は、トレシーに置き換えることが可能であると思われる、当院では、患者さんの更衣室等の清掃にも活用しています。要は、使用者側が自施設的环境をコスト面と合わせて正しく評価して、資材を適時適切に使用することが重要であると思われます。